

2019年度活動報告

本プロジェクトは、次の二つのアーカイブ活動の総称である。一つは、名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる森村泰昌（1951-）の文献資料を対象とする「森村泰昌アーカイブ」（2000年5月～）であり、もう一つは仏教美術、京都の文化、また美術作家の作品や展覧会の記録など幅広く撮影し続けた写真家の井上隆雄（1940-2016）の写真資料を扱う「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」（2017年4月～）となる。

森村泰昌アーカイブでは、今年度は関連資料のうち引き続き新聞記事を中心に整備し、文字データは1999年と2000年、画像は1995年の一部と1998年、1999年、2000年分を入力した。また、芸術資源研究センターにて公開中の森村泰昌関連資料データベースのデータの修正追加を行ない、資料の活用について検討した。

井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究では、昨年度11月より開始したインド・ラダック仏教壁画の資料群に対する共同研究に重点的に取り組んだ。井上隆雄の写真資料には、インド・ラダック地方の写真群があり、外国人の入域制限が解かれた1974年頃の仏教壁画群に関する1,000点を超えるポジ類、多数の資料類が残されている。その時の撮影をもとに1978年に駿々堂より出版された井上隆雄『チベット密教壁画』があるが、収録から抜け落ちた資料群も多数あり、また撮影時の取材ノート、メモ類も残されている。今年度は、膨大なポジフィルムを寺院別に分類する作業を終え、デジタル化を進めている。また図像研究として重要とされるアルチチョスコル寺院とサスポール寺院に対しては、寺院内の空間構造に基づいたデータベース構築を進めている。このデータベースの仕様は、少人数でのメンバー構成だからこそその意見交換と共有意識によって検討された。このことはアーカイブの恣意性と創造性という点で示唆的であると考えており、ここからアーカイブ実践の方法論や意義について今後も考察していきたい。またアルチチョスコル寺院三層堂の「般若波羅蜜仏母」のデジタル化による細部の観察では、共同研究者の正垣雅子先生により具体的な描写と筆致を確認することができた。当時、ラダックの仏教美術に影響を与えたカシミール地方の様式と称される表現技法を理解することにつながる。成果報告として、2019年6月22、23日に帝京大学で開催された第41回文化財保存修復学会全国大会でポスターセッションによる研究発表を行った。

共同研究と並行し、井上隆雄全資料の内容と点数確認を終え、目録を作成した。井上隆雄が残した作品やフィルムは、現在もなお貸し出しの依頼がある。目録は今後の利活用にとって有効な資料となる。

この二つのアーカイブ活動は、今後も管理・保管している実資料を対象に、データベースの構築とそのプロセスの検証を進め、美術関連資料からの美術・文化史研究への方法論をより多面的に検討していく。

山下晃平（美術学部非常勤研究員 芸術資源研究センター客員研究員）